



東北地方を襲った未曾有の大震災からはや半年。難局の中、モラロジーという羅針盤を頼りに復興を遂げる、福島県須賀川市、宮城県塩竈市の企業を訪ねた。

苦難の時に試される絆

不屈の東北企業① 福島県須賀川市



(株)オノヤ取締役会長
おのけいこ
小野佳子
(須賀川モラロジー事務所)

山間部・須賀川市の被害

須賀川に暮らす庵の主の、ひそやかで奥ゆかしい人柄を、「世の人の見付けぬ花や軒の栗」と松尾芭蕉は詠んだ。そんな温情深い人々を育む福島県須賀川市は、福島市の南、山間部に位置する。福島第一原子力発電所のある沿岸部からは約六十キロ。
津波被害の甚大な沿岸部とは異なり、メディアに取り上げられることは少ない

突然の社長就任

地震発生より十日前の三月一日、七十歳を目前に、小野佳子さんはオノヤの経営バトンを長男・浩喜さんへ渡し、取締役会長に就任した。三日、大勢の社員に囲まれての就任パーティーで、あいさつを述べる佳子さんの姿があった。「子育て

(株)オノヤ

創業/昭和10年5月
設立/昭和25年10月
住所/福島県須賀川市池下23番地3
従業員数/53名
資本金/1000万円
事業内容/リフォーム工事業
関連会社/株式会社オノヤ商会(資材卸売り)
株式会社オノヤ不動産

て、商売と大勢の方
に支えられた半世紀
でした。これからは
会長として恩返し
の人生を送ってまい
ります——。

昭和十年に義父・
小野伊次郎さんが自

動車用品の販売で創業したオノヤは、作業服販売、松下電工代理店、資材の卸売りと、時流に乗って商売の形を変えながら事業を展開してきた。
義父の後を継いだのは、夫の権一さんだった。工務店を対象とした資材の卸売りに特化したオノヤは、先代から積み重ねた信用を武器に、少しずつ業績を伸ばしていった。営業で飛び回る夫の傍ら、妻である佳子さんが会社の事務を一手にこなし支えた。古い店舗では、雨の日に店先に材料を練るトロ舟を置き雨漏りをしのぐような日もあったが、「いつかこの中に、立派な錦鯉が泳ぐようになるからな」と言う夫と二人三脚で、地道で

誠実な商売を続けてきた。

それは社員も増え、念願かない国道沿いに新店舗オープン計画が進む平成七年のことだった。妻の付き添いで行った病院で、なにげなく受診した健康診断、権一さんに下された診断は白血病。

「夫は、こんな一世一代の大事業の時になぜ自分がこんな目に遭うのかと嘆きました。どんなに辛い治療も我慢して、一日も早く商売に復帰したいと願っていました。それがかなうことはありませんでした」。平成八年四月のオープン当日、その日一日だけ、抗がん剤でやせ衰えた体で、髪の毛の抜けた頭にはかつらを着け、社長として全社員の前にあいさつに立った。お客様のため、地域のための立派な店ができたことと喜ぶ夫の横で、佳子さんには万感が胸に迫る。

平成九年二月、権一さんの逝去により佳子さんが社長に就任した。権一さんの亡くなる一年前に、長男も東京の勤め先から戻ってきていたが、そこは信用がものをいう商売。創業のころからオノヤを支え、一緒に苦勞をしてきた社員もいる。皆をまとめ、権一さんの思いを引き継ぐために佳子さんが社長として、オノヤのかじ取り役となった。

内陸部だが、三月十一日の地震がもたらした被害のつめ跡は深い。

家屋全壊三百八十棟以上、半壊・大規模半壊も七百四十棟以上に上る。事務所などの非住宅地を合わせれば、二千棟以上が被災した。被害は農地や水路にも及ぶ。高さ十八メートルの灌漑用ダム・藤沼湖は決壊し、もう一つの「津波」となつて山間部を襲った。百五十万トンに二十五メートルプール四千二百杯分の水は濁流となり、家屋や畑、人命まで飲み込んでいった。

震災から半年が経とうとする今も、復旧の見通しが立たない観光施設、ライフラインは戻っても、今度は原発問題が須賀川に暗い影を落とす。

地震、津波、原発問題、積み重なる困難の中、苦渋の決断で社員と会社を守つた企業がある。

オノヤは、時代の移り変わりと共に資材の卸売りから、一般ユーザーを対象に迅速で細かなサービスも請け負うリフォーム事業へと主力を移していった。リフォーム事業は専務となった浩喜さんを先頭に立たせて実力を養わせ、事業が軌道に乗った時期を見て、社長交代を言い渡した。

苦渋の決断

佳子さんが、会長就任の感謝と新たな決意を胸に歩き出したその八日後、須賀川市は震度六強の地震に襲われた。
何かを覚悟するほどの大きな揺れ。揺れが収まった同社の一階には、重機の棚や書棚が無残にも散乱し、二階の外



亡き夫と共に築いたオノヤ本社



壁は崩れ落ち、窓ガラスも割れて散乱していた。

ショールームを兼ねた店舗の目の前を通る国道は、その時間を置かず家路を急ぐ車で渋滞となったが、その波をかき分けるようにして、一台また一台とオノヤへ車が入ってきた。それは、震災直後からの電話が不通の事態に、直接オノヤへ駆け込んできたお客様だった。

屋根が飛んだ、屋根瓦が落ちた、戸が閉まらない、壁に亀裂が入った、今晩眠れない、なんとかしてほしい――。

お客様が困っている。われわれを必要としている。自身の家を気に掛けながらも、会社に残っていた社員は皆で立ち上がった。工事をお願いする職人に連絡を取るにも、手段がない。お客様の名前と住所をメモし営業車に飛び乗ると、職人を連れて現場まで向かった。それぞれの使命感に、夜まで作業は続いた。

明くる日から、作業は休日を返上して続いた。お客様の多さに職人も足りず、ブルーシートを掛けるだけの応急処置しか施せない場所もあった。

そして三月十五日、福島第一原子力発電所の水素爆発。オノヤは苦渋の決断を迫られることになる。その日のことを佳

業を再開できたのは四月一日だった。「私たちにできることを少しでもやりたい」「こんな時だからこそがんばらないと」。そんな声が社員から自然とわいて出てきたことを、佳子さんは心から喜んだ。「オノヤがずっと追い求めてきた真の利益は、社員の幸せ、お客様の幸せ、地域社会の幸せでした。まずは社員が安心して働いて、幸せでなければ、お客様の些細な声をくみ取ることができず、還元できる利益も生まれてこないという信念でここまでやってきました」

絆を深めるためにと毎年企画する社員を連れての合宿、向上心旺盛な社員たちのために、職人を講師として、小さな家を一軒建てながら家の構造を一から勉強したりもした。社員が手に取りたいと

不屈の東北企業① 福島県須賀川市

子さんはこう語る。

「さすがに原発が水素爆発を起こした時は、もうダメだと思えました。情報も錯綜し、こうなってしまうては、避難したい社員も多いただろうし、実際にそうさせてあげたかった。オノヤの社員は平均年齢二十九歳と若く、親御さんからは子供を避難させてほしいとの切実な要望もありました。ここでもし会社を閉めなければ、帰った社員は「逃げた」と見られるかもしれない。でも、お客様からは修理の依頼が次々と舞い込んでくる。でも、社員の安全とご両親の気持ち pensando...」

出した答えは、翌十六日からの休業。佳子さんは言った。「社員を守るのがオノヤの使命だからです」。

手配できるだけのガソリンで、お客様に理解を求めて走った。「修理を少し待っていただけませんか」。崩れかかった家々を通り抜けながら、心が痛んだ。

仮に設定した営業再開日は六日後。原発が落ち着きを見せたら、もう一度一緒にがんばろうと言って、社員は方々に散

希望する住宅・建築の関連書籍はできるかぎり会社が用意し、知識習得のバックアップをした。一方では、技術があるだけがオノヤの求めるスタッフではないと、協力業者の方を対象に始めたマナーの勉強会。社員全員をモラロジのセミナーに参加させているのも、オノヤは心を売る商売と佳子さんが考えているからだ。見事この危急にあたって、佳子さんが育てた社員はお客様の喜びを第一に考えて行動に移した。

営業再開と同時に、社員たちは修理を待たせてくれたいたお客様の所へ飛んでいった。佳子会長、浩喜社長の決断で、誠心誠意対応するだけでなく、二百件近い住宅の応急処置をすべて無償にした。それは、社員を守るためとはいえ、会社を閉めたせめてものおわびの印だった。

震災後、資材の卸売りも行うオノヤには、はがれ落ちた風呂場のタイルや、屋根瓦などを求めるお客様も大勢訪れた。他県から業者が来ることもあり、求められた資材の無い時には、お客様のためにとの思いから、要望に近い資材が置いてありそうな店を調べ、電話をし、場所を教えさせてあげた。

「わが社の売上げにかかわらず、オノヤ

った。一度店を閉めたら、二度と再開できないのではないかという不安は残った。

営業再開を支えた絆

余震が落ち着いたとはいえ、不安の残る福島に社員はどんな気持ちで戻ってくるだろうか。そんな佳子さんの心配をよそに、全社員が燃えていた。

二十二日には、修理の必要な現場で即時に判断を下せるベテラン社員だけを集め、オノヤは営業を一部再開した。原発の影響を考慮し、全社員そろって通常営



創業76年目を迎えるオノヤ

の玄関をくぐってくださった方は、皆さん大切なオノヤのお客様です。来てくださった方には、心づかい一つ、笑顔一つだけでもお持ち帰りいただきたいではありませんか」

そうした対応は、結果としてオノヤのファンに新たなお客様を生み出すことにつながった。

「震災を機に、社員に、そして私自身にも、自分の力をお客様のために発揮したいという思いやりの心がいつそう強くなったことを感じます。特に若い社員たちは、自分たちの手でこの福島を復興させると使命感に燃えています」

逆境に立った時、人も企業も、本当に大切にしていることが明るみに出る。日本中を震撼させた東日本大震災も、強固に結ばれたオノヤの絆までは崩すことができなかった。

「絆さえあれば、いつからでもどこからでも復活できるのです。三月の震災後、新社長に言ったのです。これより厳しい状況に落ちることなんてないわ。今を乗り越えれば、必ず大丈夫です」

少しづつ立ち直る須賀川の町を見つめながら、佳子さんはそう締めくくった。

(本誌)